国立国語研究所学術情報リポジトリ

Usage of a New Negative Suffix -yan among the Young Generation of Kansai Speakers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鳥谷, 善史, TORITANI, Yoshifumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000466

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 9: 159–176 (2015)
ISSN: 2186-134X print/2186-1358 online

関西若年層の新しい否定形式「〜ヤン」をめぐって

鳥谷善史

天理大学／国立国語研究所 共同研究員［–2013.09］

要旨

近畿中央部の否定形式には「〜ン」や「〜ヘン」類という 2 種類の形式が存在する。現在その意味的異なりは若い世代においてはなくなりつつあるという。その中で，大阪府や奈良県の世代差に注目した調査結果から若年層の 2 拍一段動詞及び変格動詞において，「〜ヤン」という否定形式が急速に広がりはじめていることがわかった。これは近畿周縁部である「和歌山県」や「三重県」の若年層から「大阪府」や「奈良県」の若年層への流入であることを言語地理学的調査結果などから確認する。また，その変化要因としては，言語内的には，これまで「〜ン」と「〜ヘン」の 2 種類で否定をしてきたがそれらが，意味的異なりを失ったことを契機として，体系的整合性や発話としての経済性を獲得するとともに，関西全域で一つの否定形式として「〜ン」のみの方向に向かっているとの見解を調査結果から論究した。ただ，五段動詞以外の 2 拍語では，これまでの形式との関係から単純に語幹＋「ン」のみに変化できず，その変化の一段階として「ミヤヘン」などの「〜ヘン」から「ミヤン」といった標準語形とは全く別の地域のアイデンティティーを生かした形式を取り入れたと考えた。この仮説は，標準語等の言語的影響を直接受けずにいる台湾日本語の変化モデルも視野に入れつつ導いたものである *。

キーワード：〜ヤン，否定形式，言語地理学，流入，体系の整合性

1. はじめに

西日本の動詞否定辞の形式は，東日本の「〜ナイ」以外にも「〜ン」や「〜ヘン」が使用されている。それぞれの使用地域の概略としては，西日本全域で，古典語の「ぬ」に由来する「〜ン」が使用され，大阪や京都また，奈良などの近畿中央部では，「見はせぬ」などの「せぬ」を由来とする「〜ヘン」類も併用して使われている。

近畿中央部におけるこの二つの否定辞の変遷は，太田（2013: 63–64）に先行研究を踏まえ簡潔に纏められている。それによると，「ン」は「本来の打消」であり，「ヘン」は「本来の強消」であったが，その後それぞれが入れ替わり，強く否定する場合に「〜ン」（例：ミン），普通に否定する場合に「〜ヘン」類（例：メーヘン・ミーヒン）を使うようになったが，現在の若年層においては高木（1999）において指摘されたように「意味的に完全に同一である」という。意味的な区別がなくなるといずれか一方が優位になり，一方は廃れていくことが予想される。

ところで，2012 年〜 2013 年に筆者が行った，大阪府や奈良県の世代差に注目した調査結果を確認すると，「〜ン」や「〜ヘン」類でもない「〜ヤン」（例：ミヤン・コヤン）で否定する若年

* 本稿は，2014 年 5 月 16 日に早稲田大学で行われた日本方言研究会第 98 回研究発表会で，岸江信介氏と共に口頭発表したものに加筆修正を加えたものである。また，本稿は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本語変種とクレオールの形成過程」（プロジェクトリーダー：真田信治）の研究成果の一部である。

層が急激に増加していることがわかった。

本稿は，これらの実態報告とその要因について考察するものである。

2. 使用実態

まず,「大阪のことば調査」[1]（以下「大阪調査」）の結果を以下に示し, 若年層で急速に拡大する「～ヤン」の使用実態を確認したい。調査項目は「見ない」[2] である。

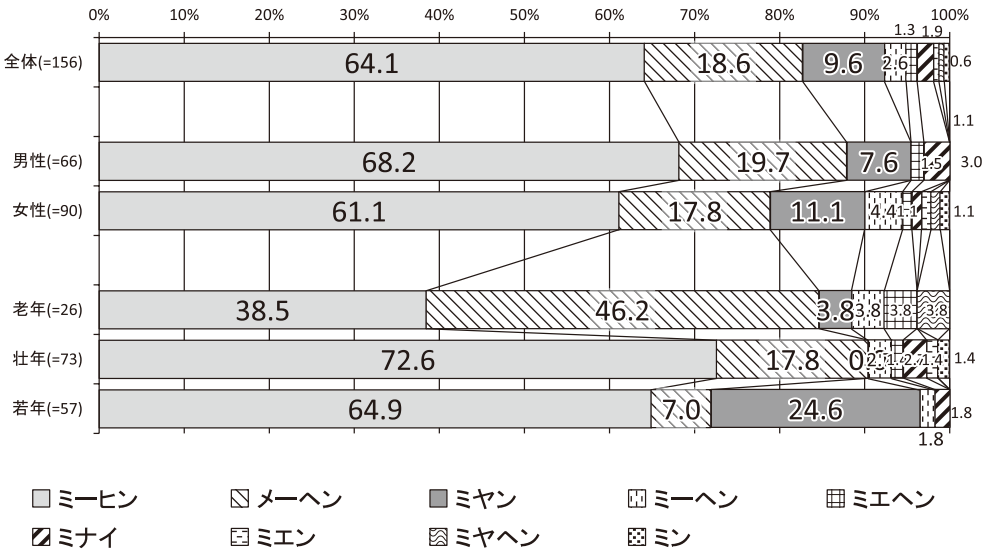


図 1　大阪調査「見ない」

図 1 大阪調査「見ない」から大阪府北中部（以下大阪）の老年層では,「メーヘン」が第 1 位の回答であるが, 年齢が下がるにつれ急激に減少することがわかる。また, 老年層で第 2 位の「ミーヒン」が壮年層で第 1 位の回答となり，若年層でも若干使用率を下げるものの，やはり第 1 位の回答である。老年層から壮年層の変化を見ると「メーヘン」から「ミーヒン」への変化が進行していることがわかる。このことから若年層でも「ミーヒン」の増加が予想されるのであるが，そうはならず，壮年層より使用率を下げる。それは，若年層では「ミヤン」が 24.6% と突然に現れ

[1] 大阪府北中部生え抜き（和泉方言域を除く）19 歳以上 81 歳までの男女 156 名へのアンケート調査。回答者の内訳は，老年層（60 歳以上）男性 10，女性 16，計 26 名・壮年層（30 歳以上 59 歳以下）男性 29，女性 44，計 73 名・若年層（19 歳以上 29 歳以下）男性 27，女性 30，計 57 名である。調査期間は，2012 年 7 月～ 2013 年 10 月である。併用回答の場合は，順位を付けて回答してもらったが，本稿執筆に際しては，第 1 位回答のみを集計した。また，調査票の最初に「近所の親しい友人や家族との会話を想定してお答え下さい」と記した。なお，本調査データは 2012 年度及び 2013 年度の近畿大学文芸学部「日本語特殊講義 1・2」の授業において受講学生が中心となって集めたものである。

[2] 大阪調査の質問文は次のとおり（奈良調査もほぼ，同様）。
図 1「見ない」:「「今日はテレビを見ない。」と言う時,「見ない」の部分をどのように言いますか。」
図 8「行かなかった」:「「昨日は仕事に行かなかった。」と言う時,「行かなかった」の部分をどのように言いますか。」

るからである。この「ミヤン」は，老年層や壮年層ではほとんどその使用が見られない。同様の調査を「大和のことば調査」[3]（以下「奈良調査」）として奈良県北部（以下奈良）でも行ったので，隣接する奈良の状況も確認する。なお，奈良調査「見ない」においては，考察を進めやすくするため「ミナイ」の回答を省いたものを示す[4]。

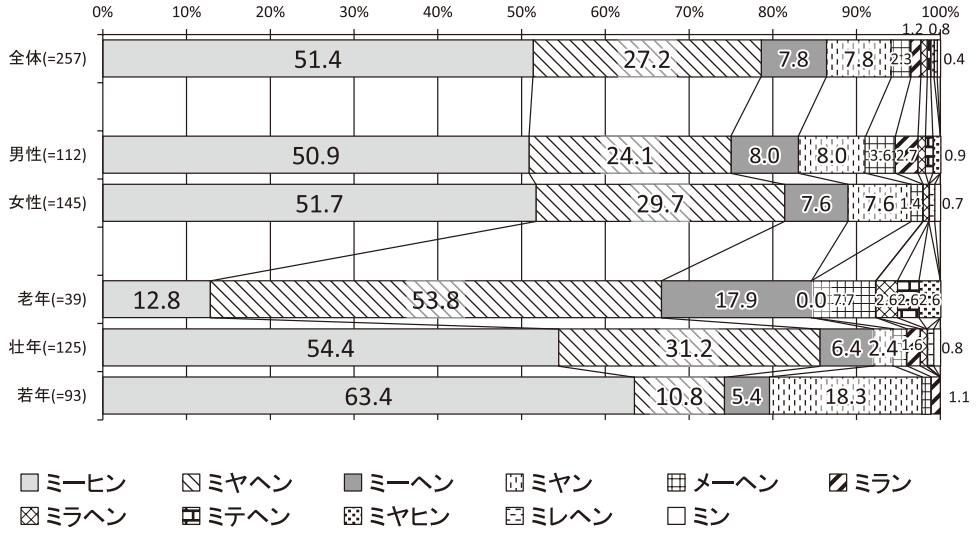


図 2　奈良調査「見ない」（「ミナイ」を含まず）

図 2 奈良調査「見ない」から老年層では，第 1 位の回答が「ミヤヘン」であり，次が「ミーヘン」，「ミーヒン」であることがわかる。隣接するとはいえ奈良と大阪とではかなり様相を異にすることがわかる。それでも，大阪と同じく，壮年層や若年層では，「ミーヒン」が増加するが，奈良では，大阪ほど若年層での使用率を下げない。ただ，ここでも若年層で「ミヤン」が 18.3% と突然，現れる。奈良の「ミヤン」は，大阪同様，老年層や壮年層でほとんど使用されないが，奈良では「ミヤヘン」が上の世代で多数存在することから「ミヤヘン」から「ミヤン」への変異とも考えられる。つまり，「〜ヘン」から「〜ン」への変化が想定できそうである。

大阪に「〜ヤン」が突然に現れる状況は，五段動詞を除く，他の活用の動詞においても見られる。概略を表 1 に示す。

[3] 奈良県北部生え抜き（南部方言域を除く）16 歳以上 87 歳までの男女 289 名へのアンケート調査。回答者の内訳は，老年層（60 歳以上）男性 23，女性 28，計 51 名・壮年層（30 歳以上 59 歳以下）男性 53，女性 83，計 136 名・若年層（19 歳以上 29 歳以下）男性 52，女性 50，計 102 名である。調査期間は 2012 年 7 月〜 2013 年 10 月である。併用回答の場合は，順位を付けて回答してもらったが，本稿執筆に際しては，第 1 位回答のみを集計した。なお，本調査データは 2012 年度及び 2013 年度の天理大学文学部「国語学演習 1・2」の授業において受講学生が中心となって集めたものである。

[4]「大阪調査」及び「奈良調査」のアンケート調査票においては，予想回答語形を選択肢として順次示した。ただ，「奈良調査」の調査票では，その最初に標準語形の「ミナイ」を示した。その結果，全体的に（特に老年層で）「ミナイ」の第一回答が多くなったため，「ミナイ」を省いた。なお，大阪調査においては最後に配置していた。

表 1　各活用動詞の否定形式の世代差（大阪）

活用	大阪	順	老年層	%	壮年層	%	若年層	%
一段	見ない	1	メーヘン	46.2	ミーヒン	72.6	ミーヒン	64.9
		2	ミーヒン	38.5	メーヘン	17.8	**ミヤン**	**24.6**
カ変	来ない	1	ケーヘン	68.0	ケーヘン	73.2	コーヘン	57.9
		2	コーヘン	8.0	コーヘン	11.3	ケーヘン	28.1
		3	キエヘン	8.0	キーヒン	11.3	**コヤン**	**10.5**
サ変	しない	1	セーヘン	70.8	セーヘン	81.4	セーヘン	62.5
		2	シヤヘン	16.7	シナイ	5.7	**シヤン**	**19.6**
五段	行かない	1	イカヘン	56.0	イカヘン	61.1	イカヘン	45.6
		2	イケヘン	36.0	イケヘン	29.2	**イカン**	**45.6**
		3	イカン	8.0	イカン	4.2	イケヘン	7.0

「来ない」以下の状況を確認する。

カ変動詞「来ない」の場合，「ケーヘン」が老年層から壮年層にかけて順調にその使用率を増加させるが，若年層では，急激に減少する。それは，「コーヘン」が老年層 8.0%，壮年層 11.3% とほとんど変化がないのに比して，若年層で 57.9% と急激にその使用率を上昇させるからである。在来の「ケーヘン」からネオ方言形式といわれる「コーヘン」への変化の実態が見てとれる。とはいえ，ここでも「コヤン」が若年層に現れる。10.5% とそれほど高い値ではないが，老年層，壮年層共に回答がないので，突然に発生したことがわかる。

次に，サ変動詞「する」の場合は，「セーヘン」が老年層から壮年層にかけて順調にその率を増加させるが，若年層で率を下げる。若年層で率を下げたのは，「シヤン」が 19.6% とここでも突然に現れるからである。

最後に，五段動詞「行かない」の状況も確認しておきたい。五段動詞の場合は，「〜ヤン」が付く形式は見られない。まず，気がつくこととして老年層では，所謂，京都的といわれる「イカヘン」が 56.0% であり，大阪的といわれる「イケヘン」が 36.0% である。つまり，大阪でも京都的といわれる「イカヘン」が優勢になりつつあるようである。これは別として，特に注目したいのは若年層における「イカン」45.6% の急激な増加である。ここでも若年層において大きな変化が起こっていることが確認できる。なお，これらについては奈良調査でも同じような傾向である。

3. 近畿地方における「〜ヤン」の分布実態

3.1 若年層の分布状況

ここでは，「〜ヤン」のうち「ミヤン」の若年層での分布を「近畿新方言地図」[5] で確認してみたい。図 3 の★印が「ミヤン」の分布している地点である。大阪府中心部はもとより，京都府や滋賀県，兵庫県のみならず，中国地方や四国地方でも確認できる。また，3.2 で詳しく確認するが，現在でも老年層の人々が使用している，三重県や和歌山県の特に近畿地方周縁部での分布も確認できる。

[5]「新方言アンケート調査」（調査対象は全国の大学生。調査期間：2013 年 12 月〜現在も継続中）の調査結果である。今回はこの中から，近畿地方及び四国・中国・中部地方の一部のデータ（1,869 名分）を利用し，該当する言語形式の分布地図を作成した。

次に,「コヤン」の分布を,「ツイッター地図」[6] で確認してみたい（次頁図 4）。これは，Twitter でツイートされた位置情報（緯度･経度情報）をもとに地図化したものである。場合によっては，出張その他の移動中のツイートも考えられるわけであるが，ビッグデータとでもいうべき夥しいデータ数（15,143）から考えれば全体の傾向性にはほとんど問題がないものと考えられる。また，Twitter を使うのはそのほとんどが壮年層以下であると考えられることから，比較的若い世代の使用状況であるといえるだろう。この地図から「コヤン」が近畿地方を中心に近畿のみならず，愛知県や岐阜県でのツイート時に使用されていることがわかる。

これらの図 3・図 4 を併せて見ると，大阪府や奈良県以外にも和歌山県北部や三重県の若年層で「～ヤン」が使われていることがわかる。なお, 3.2 で述べるとおり, 和歌山や三重の「ミヤン」は，高年層世代から受け継がれてきたものであるのに対し，「コヤン」は新たに発生した「コーヘン」や「キヤヘン」が関係して発生したものであり，主に若年層が使う形式である。

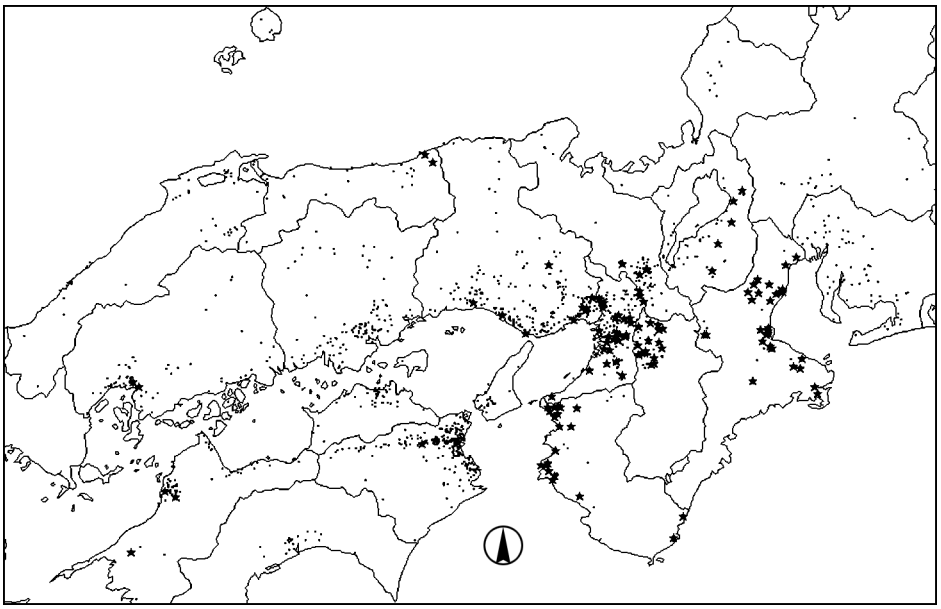


図 3　近畿新方言地図「ミヤン」

[6] 2012 年 2 月～ 2014 年 1 月の 2 年間で 1 兆以上ある全ツイッターデータの中の日本国内約 1 億 1 千万件のデータ（全ての投稿の 0.3%：モバイル機器（携帯電話など）から投稿され，会話相手が明示されたもの）。なお，「コヤン」は 15,431 件。その地点を地図化したものである。詳細は，桐村・峪口・岸江（2014）参照。

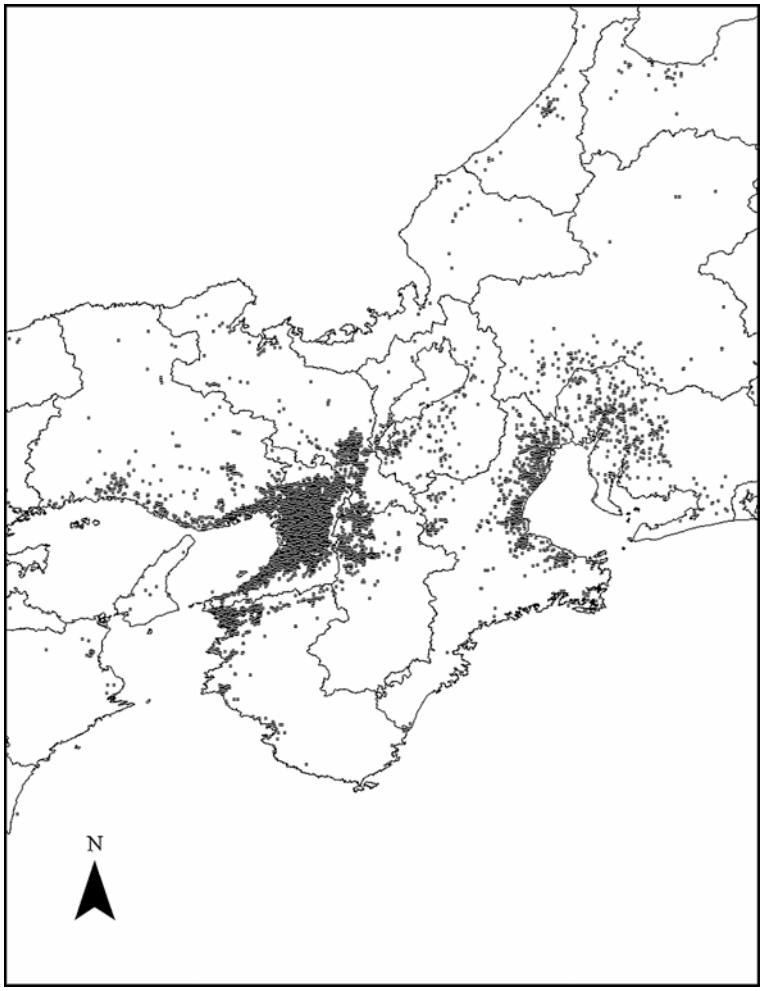


図 4　ツイッター地図「コヤン」

3.2 老年層の分布と流入状況

ここでは図は省略するが, 1979 ～ 82 年に全国の老年層を調査した, 国立国語研究所編（1991）『方言文法全国地図』（GAJ）第 2 集第 74 図「見ない」を確認すると，奈良県や和歌山県，三重県といった地域に「ミヤン」が分布していることがわかる。また, 現在の老年層の使用実態は図 5「近畿言語地図 [7]「見ない」（岸江 2014: 234)」で確認することができる（太枠内 : ミヤン)。これらに

[7]『近畿言語地図』［筆者注 : 方言通信調査］は, 近畿地方の 2 府 6 県（京都府, 大阪府, 奈良県, 兵庫県, 滋賀県, 和歌山県, 三重県, 福井県（但し嶺南地方のみ））を対象とした言語地図で, 調査方法は通信調査法による［筆者注 : 留置法による調査も並行して実施（岸江 2014，注 1)］。調査期間は 2011 年 7 月 –2014 年 2 月，対象とした回答者の条件は原則として，各地点生え抜きの 65 歳以上の方（男女を問わず）であり，平成 25 年 12 月 1 日現在，回答者数は 756 名である。現在までに調査票を近畿各地に約 1,200 部を送付し約 65% を回収している。（岸江 2014: 231）

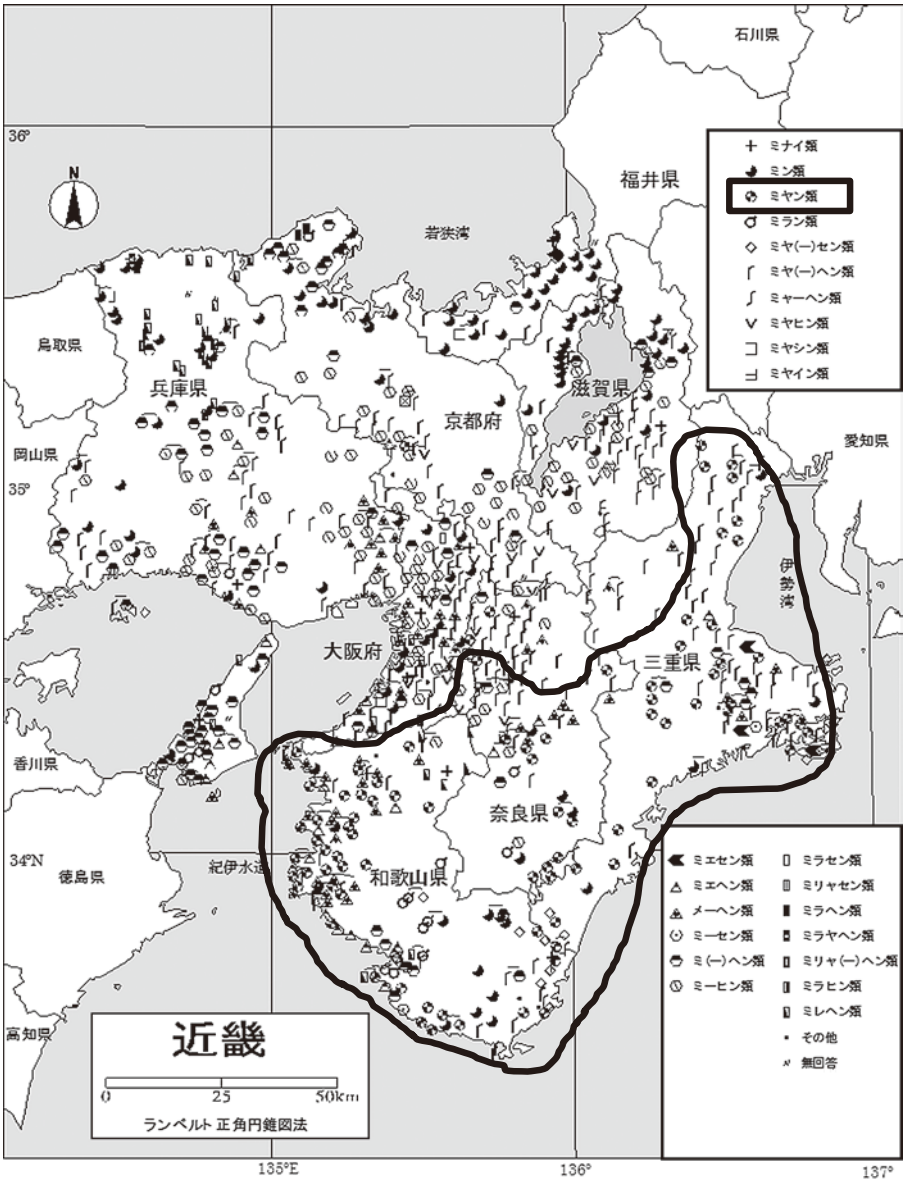


図 5　近畿言語地図「見ない」（岸江 2014: 234 図 4）（※太線は筆者加筆）

よると，ほぼ三十数年の間に，奈良県北部での使用は減少しているが，奈良県南部や三重県や和歌山県では，現在でも多くの老年層が使用していることがわかる。このことから，大阪調査や奈良調査の若年層に突然現れる「ミヤン」は，これらの地域から流入[8]してきたものと考えられる

[8]「流入」としたが，これは本来「伝播」という用語が，方言周圏論との関係で使われる術語と考えることから，ここでは周縁部から中心（都市）部への伝播を特に「流入」という語で表現した。方向性を考えない，単なる人から人へことばが「伝わった」という場合はカギ括弧付きの「伝播」とした。

のであるが，その流入状況は，若年層から若年層であるようだ。

そのことは，次の図 6「近畿言語地図「来ない」（岸江 2014: 236)」を確認すると，明らかになる。それは，図 5「見ない」で「ミヤン」が分布した地域には，図 6「来ない」の「コヤン」がほとんど確認できない。つまり，「コヤン」そのものを使う老年層がほとんどいないということである（太枠内に数地点確認できる)。「コヤン」は，3.3 に示すとおり，「キヤヘン」と，新たに発生した「コーヘン」が関係してここ数十年の間に新たに発生した形式だからである。また，

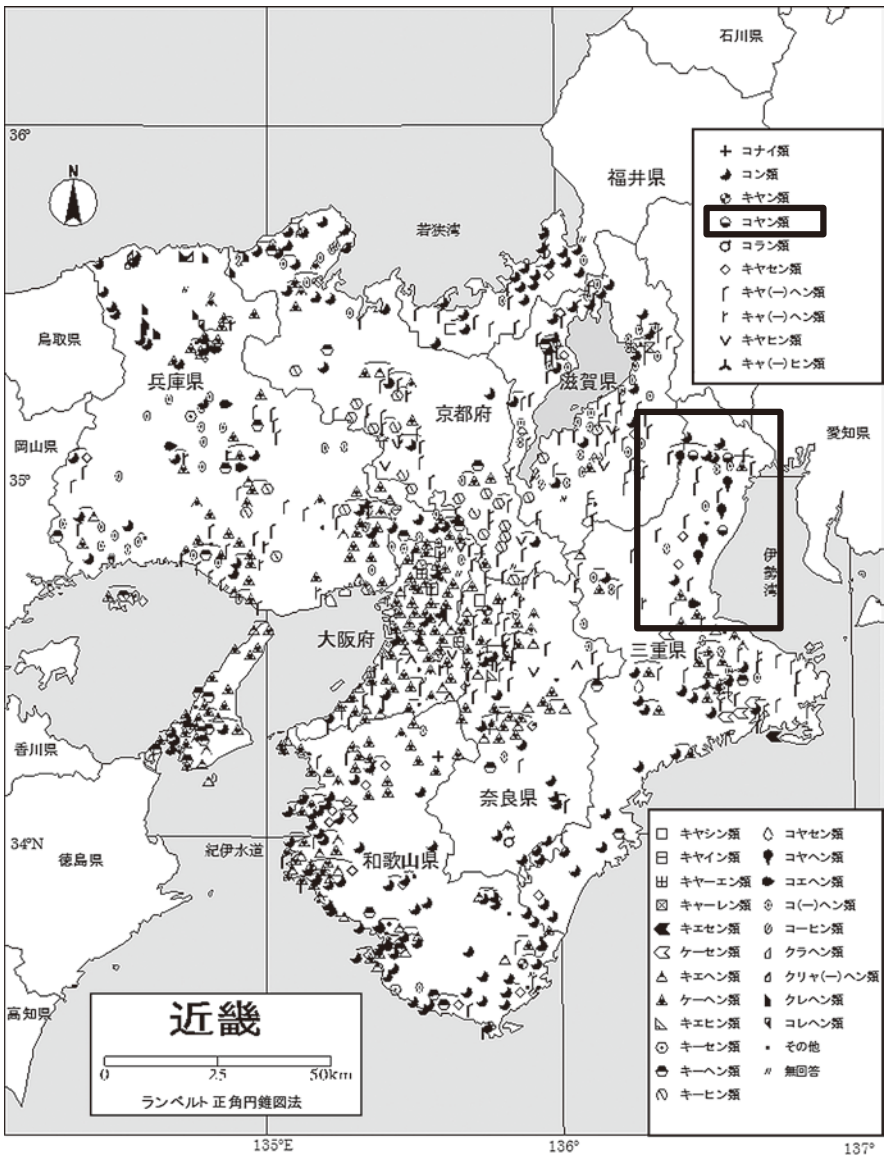


図 6　近畿言語地図「来ない」（岸江 2014: 236 図 5）（※太枠は筆者加筆）

3.1 で示した図 4「ツイッター地図「コヤン」」を見ると，奈良県や和歌山県，三重県といった地域で「コヤン」が多数確認できることから流入であっても若年層から若年層への「伝播」であることが確認できる。それらが近畿中央部に流入してきたと考えられるのである。

3.3「コヤン」発生のメカニズム

なお,「コヤン」の発生について, 図 6「来ない」を見る限り, まず, 伝統的な形式から「コーヘン」が発生し，その後「キヤヘン」の影響を受けて「コヤヘン」や「コヤン」が発生しているように見られる。分布を注意深く確認すると，三重県の伊勢湾沿いに「コヤヘン」がまとまって分布しているが, その直ぐ側には「コーヘン」も分布し, それらの地域で「コヤン」が数地点確認できる。このことを裏付ける資料として, 表 2「「来ない」(太田 2013: 66 表 2 より)」の「紀伊半島沿岸グロットグラム」を確認したい。なお，調査は 2003 年である。

表 2 「来ない」(太田 2013: 66 表 2 より)（※表中の太枠は筆者加筆）

県名	地点番号	地点名	10－20代	30－50代	60代－
三重県	25	鳥羽市坂手町	※※	※	※
	26	磯部町	▲▲☆	※	※◎
	27	浜島町	☆	※	●–
	28	南勢町	❖	☆ ●–	●–
	29	南島町	☆		※※
	30	紀勢町	◈ ◎	◎	※
	31	紀伊長島町	☆ ◎	◎	◎
	32	海山町	◎	※◎	※
	33	尾鷲市旧市街	☆☆	※	※
	34	尾鷲市九鬼	☆☆ ◎	☆ ※	n
	35	熊野市飛鳥町	◎◎	◎	◎ ●–
	36	御浜町	☆ ◎	◎	●–
	37	紀宝町	☆ ◎◎	n	◎ ●–
	38	紀和町	◎		◎
	39/40/41	鵜殿村	⋈ ◎◎	◎	◎
和歌山県	42/43/44	新宮市	◎◎◎	◎	⋈ ●–
	45	那智勝浦町	◎ n	◎ ●–	●–
	46	太地町	◎◎	●–	◎
	47	古座町	⋈ ◎	●–	※
	48/49/50	串本町	n	※※	◎ ●–
	51	すさみ町	◎◎	◎	◎
	52/53/54	上富田町	☆ ◎◎◎	★	⋈
	55	田辺市	◎◎	◎	★

凡例 ◎ コン ☆ コーヘン ▲ コヤン ❖ コヤヘン
★ キーヘン ※ キヤヘン ●– キヤセン ●– キヤシェン
⋈ ケーヘン ◈ コラヘン n 無回答

この表から，三重県磯部町の 10–20 代に「コヤン」が 1 地点 2 名のみ，確認できるのであるが，この地点や周辺の 60 代以上には「キヤセン」「キヤシェン」「キヤヘン」や「コン」が存在する。

また，30–50 代では「キヤセン」「キヤヘン」や「コーヘン」が存在し，10–20 代に「キヤヘン」「コヤヘン」「コーヘン」が確認できる。これらの分布と世代差から「キヤヘン」と「コーヘン」が混交して「コヤヘン」や「コヤン」が発生していることが確認できる。

上記の記述をまとめたのが表 3 である（表 2 太枠内。ただし世代は左右逆とした）。同じ三重県とはいえ，ここは図 6 太枠内の「コヤン」が分布する地域より遙かに南側であるが，「コヤン」発生に関係する語形はほぼ同じである。表 3 に見られるのと同様の変化が周縁の同じような言語環境や社会環境を備えた地域で散発的に発生したものと考えられる。

表 3　グロットグラムから見る「コヤン」発生のメカニズム

60 代–		30–50 代		10–20 代
キヤセン キヤシェン キヤヘン	⇒	キヤセン キヤヘン	⇒	 キヤヘン
コン		コーヘン		コーヘン コヤヘン **コヤン**

4. 受容要因とその属性（これまでのまとめ）

これまで見てきたように，大阪や奈良といった近畿中央部では，新しい否定形式として「～ヤン」が若年層で突然使用されはじめている。これは，第 3 節で見たとおり，三重県・和歌山県といった周縁部の若年層から近畿中央部の若年層への流入である。井上（1993）が首都圏で指摘した現象と同じである。近畿圏でも同様の，言語変化が確認できたことになる。実際には，大阪や奈良の若年層では依然として「見ない」では「ミーヒン」，「来ない」では「ケーヘン」，「しない」では「セーヘン」と，「～ヘン」類がまだまだ優勢であるが，「ミヤン」，「コヤン」，「シヤン」という形式が言い切りの形で，大阪や奈良で行った調査で若年層に突然現れること，また，第 3 節の図 3 や図 4 から関西全域のかなり広い地域におよんでいることがわかった。

近畿中央部で若年層において急速に「～ヤン」が使用されるようになった要因を特定することは難しいが，「ミヤン（見ない）」，「ネヤン（寝ない）」，「デキヤン（できない）」，「サレヤン（されない）」など，一段活用の動詞に接続する場合，言い切り形が先行したというよりも，「ミヤナアカン（見なければいけない）」，「ミヤントアカン（見ないといけない）」，「ミヤントコ（見ないでおこう）」，「ミヤントイタラ（見ないでおいたら）」などの形式を古くから近畿中央部の女性が使用していたため，これらが引き金となって言い切りの形も定着したと見ることができそうである。なお，属性を女性と特定したが，それは表 4 の調査結果の使用率の男女差から「～ヤン」を積極的に使用するのは女性であることがわかるからである。

また，図 3 や図 4 からは，京都や大阪を中心とする各語形の周圏分布が確認できるのであるが，これらからも「～ヤン」を受容しやすい下地があったと考えられる。それは，大阪や京都に対して周縁の奈良では，老年層では，「ミヤセン」や「ミヤヘン」などのより古い形式が残存し，実

際に使用されていたため受け入れられやすく，そのため，大阪に比して男女差が小さいのだと考える。なお，五段動詞の「～ン」において，大きな男女差が見られないこともその裏付けとなるのではないかと考える。また，これらは，次節以下の根拠でもある。

表 4　若年層「～ヤン」使用の男女差

活用	語形（地域）	男性 （大阪：27　奈良：52）	女性 （大阪：30　奈良：50）
一段	ミヤン（大阪） ミヤン（奈良）	28.6% 41.2%	**71.4**% **58.8**%
カ変	コヤン（大阪） コヤン（奈良）	16.7% 37.5%	**83.3**% **62.5**%
サ変	シヤン（大阪）	27.3%	**72.7**%
五段	イカン（大阪） カカン（奈良）	42.3% **55.0**%	**57.7**% 45.0%

5.「～ヤン」への変化要因（言語内の要因）

ただ，近畿中央部の若年層が「～ヤン」を急激に取り入れつつあるのはもっと別の大きな言語内の要因が働いていそうである。以下では調査結果の他の項目からそれらの要因を探ってみたい。

5.1 拍数との相関

これまで例にしたものは，全て 2 拍の動詞であった。拍数の違いによる状況を確認するために 3 拍語での状況を見てみたい。表 5 は，若年層の 3 拍の動詞終止形の調査結果である。

表 5　一段動詞（3 拍）（若年層）

3 拍語	順	若年層	%	3 拍語	順	若年層	%
食べない （大阪）	1	タベヘン	73.7	飽きない （奈良）	1	アキヒン	57.4
	2	**クワン**	**8.8**		2	アキヘン	27.2
	3	**タベン**	**7.0**		3	**アキン**	**9.9**
	4	クワヘン	5.3		4	アキナイ	4.0
	5	**タベヤン**	**3.5**			**アキヤン**	**0.0**
起きない （奈良）	1	オキヒン	53.5	借りない （奈良）	1	カリヒン	43.0
	2	オキヘン	26.7		2	カリヘン	24.0
	3	**オキン**	**10.9**		3	**カリン**	**14.0**
	4	オキナイ	5.9		4	**カリヤン**	**12.0**
	5	**オキヤン**	**1.0**		5	カリナイ	4.0

これによると 3 拍でも，2 拍動詞同様「～ヘン」類が極めて優勢ではあるが，奈良の「カリヤン」の 12.0% を除いて「～ヤン」がほとんど使われない。むしろ「～ン」の方が優勢であることがわかる。つまり，拍数が増加すると「～ヤン」が使われにくく，「～ヤン」は主に 2 拍の動詞で使用されはじめていることがわかる。

5.2 否定過去形式との相関

次に，近畿地方の現在の老年層の否定過去形式の分布状況から過去形式を確認したい。岸江（2014: 240）の記述によると「西日本ではよく知られているように，近畿・中四国・九州で，否定過去の形式として -ザッタ，-ナンダ，-ンカッタが分布し，-ザッタ > -ナンダ > -ンカッタの順で変遷したことが地理的分布のみならず，文献などからもたどることができる（大西 1999）。」とある。図 7「近畿言語地図「行かなかった」（岸江 2014: 241 図 9）」を確認したい。これによると大阪府北中部や奈良県北部では，「〜ナンダ類」やこれから変異したと考えられる「〜ンダ類」の分布も確認できるが，大阪府や奈良県の老年層では「〜カッタ類」が優勢であることがわかる。

図 7 の分布を参考にしながら，表 6 の「否定過去形式（大阪・若年層・2 拍）」を確認したい。

まず，大阪の若年層の場合，過去の形式としては，ほぼ全てが「〜カッタ」であることがわかる。五段動詞以外は全て「〜ヘン」類 +「カッタ」が第 1 位の語形である。また，「〜ヤン」+「カッタ」の使用率（五段動詞では見られない）は，表 1「各活用動詞の否定形式の世代差（大阪）」の結果と比較してわかるとおり，それぞれ使用率を下げる（サ変動詞「する」の場合が微減するのは「セ」と「シ」の関係であろう）。表 1 の否定形式では「ミン」，「コン」，「セン」がほとんど使用されないのに比して否定過去形式，つまり「否定形式」+「カッタ」では，「ミン」，「コン」，「セン」の使用率が急激に増加する。加えて，ここで，特に注目したいのは，五段動詞「行かなかった」では「〜ヘン」+「カッタ」よりも「〜ン」+「カッタ」が極めて優勢になることである。これは，図 8「大阪調査「行かなかった」」からもわかるとおり，上の世代とは全く状況を異にする。72.7% の若年層が「イカン」+「カッタ」と回答しているのである。

以上の調査結果から，近畿中央部の若年層では，否定過去形式の五段活用で「〜ヘン」+「カッタ」から「〜ン」+「カッタ」の方向に急激に変化をとげつつあり，そのことが，五段以外の他の活用に影響を及ぼしはじめていると考えるのである。そして，それは過去を伴わない単純な否定形式の場合も同様で，「〜ン」のみの方向に変化しつつあると考えるのである。今回五段以外で観察された「〜ヤン」の使用拡大は，その変化のプロセスの一つの段階として所属語彙の多い五段で発生した変化が引き金となり，五段以外の動詞に影響を及ぼし，五段以外の 2 拍動詞の否定において「〜ヤヘン」から変化した「〜ヤン」が利用されたためであると考えている。プロセスの一つの段階と述べたが，今後必ずしも「〜ヤン」が定着しないという意味ではなく，「〜ヘン」と「〜ン」が急激に「〜ン」に統合されようとする変化プロセスの一つの段階で「〜ヤヘン」が「〜ヤン」に変化し急激に流入してきたと考えている。また，地域によっては，話者の中で「〜ヤヘン」が「〜ヤン」に直接変化している場合もあるのではないかと考える。なお，その直接の言語内的要因は，2 種類の否定形式が若い世代で意味の区別を失ったことである。

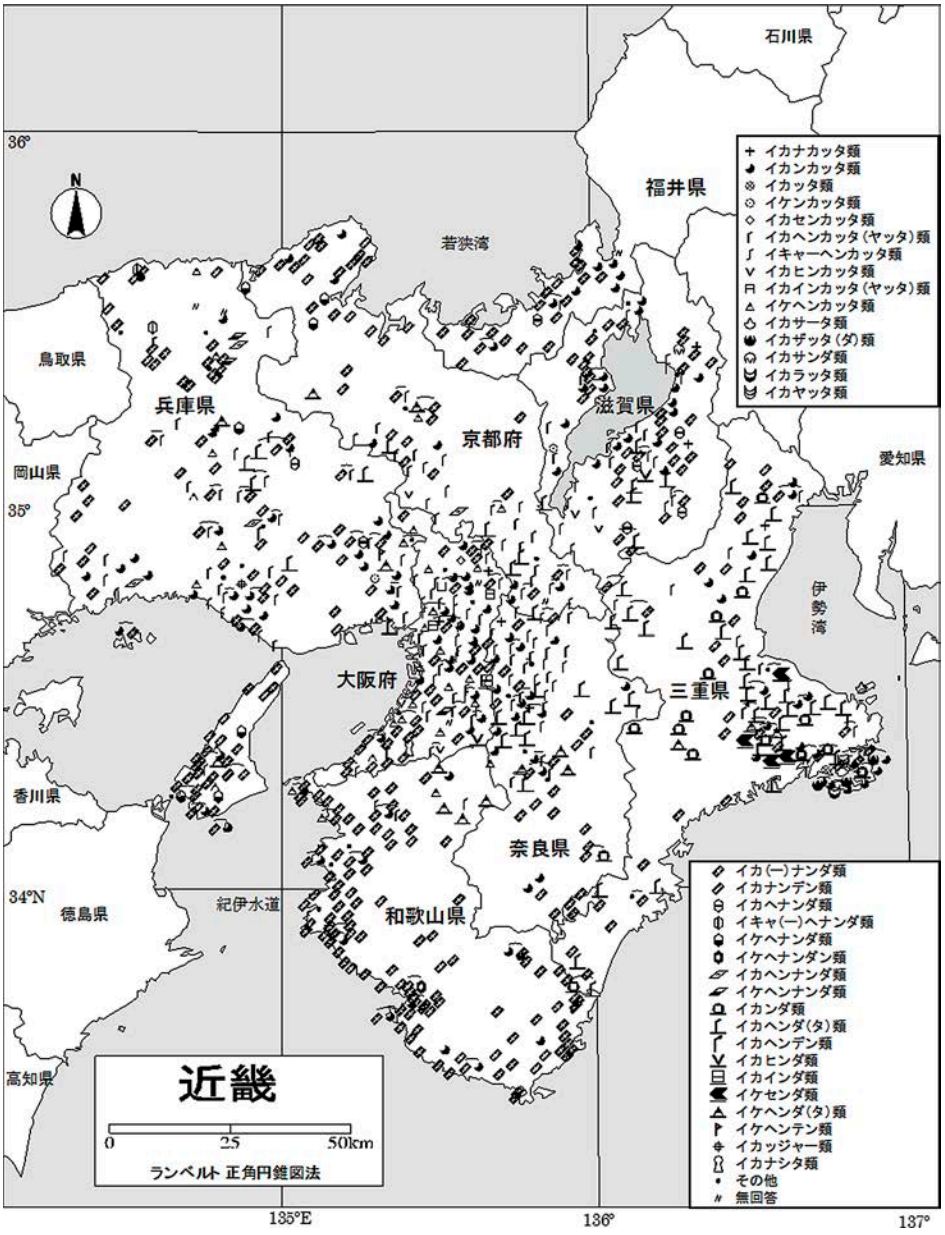


図 7　近畿言語地図「行かなかった」（岸江 2014: 241 図 9）

表 6　否定過去形式（大阪・若年層・2 拍）

順	一段「見なかった」		カ変「来なかった」		サ変「しなかった」		五段「行かなかった」	
1	ミーヒンカッタ	45.6	コーヘンカッタ	32.1	セーヘンカッタ	40.4	**イカン**カッタ	**72.7**
2	**ミン**カッタ	**26.3**	**コン**カッタ	**30.4**	**セン**カッタ	**31.6**	イカヘンカッタ	14.5
3	**ミヤン**カッタ	**19.3**	ケーヘンカッタ	28.6	**シヤン**カッタ	**19.3**	イケヘンカッタ	12.7
4	メーヘンカッタ	0.0	**コヤン**カッタ	**7.1**	シーヒンカッタ	5.3	—	

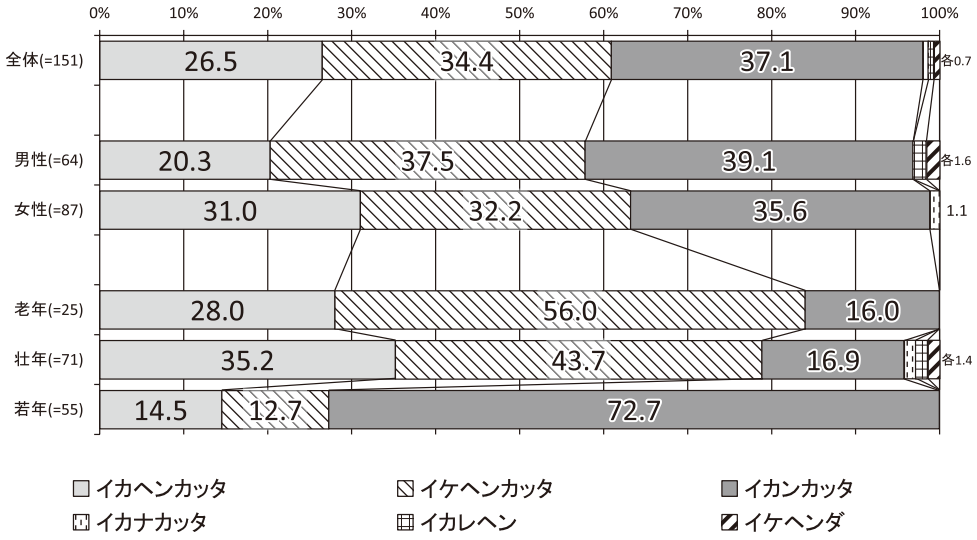


図 8　大阪調査「行かなかった」

5.3 台湾日本語変種の変化モデルとの相関

以上の考えを敷衍する意味で，簡（2011: 104–106）の調査結果の考察を示したい。その「第 6 章　否定辞」の「6.5 否定辞の使用から見る変容のプロセス」に，以下の記述がある。なお，台湾残存日本語の否定辞は「～ナイ」と「～ン」であるが，これを近畿中央部の「～ン」·「～ヘン」の関係に置き換えて対照すると，そこに類型的に相似するメカニズムが認められるのである。

> （前略）否定辞ンとナイが競り合った結果，ンが一段・カ変・サ変動詞から先に消滅して，五段動詞にしか残らなくなった。五段動詞の中では特にラ行に使われやすい。ンは消滅に向かい，その順は「一段・カ変・サ変動詞→ラ行以外の五段動詞→ラ行五段動詞」であると推測される。
>
> ラ行五段動詞にンが用いられやすいのは，ンがラと結合して一つの形態素となり，ラ行五段動詞の否定形が「～ラン」と見なされたためと考えられる。（簡 2011: 105）

上記の記述から勢力の強い方が弱い方を駆逐し，一つの形式になっていくプロセスが見てとれるのであるが，ンを「ヘン」，ナイを「ン」と置き換え，しかも勢力を逆転させた場合を想定してみると次のように仮定できそうである。すなわち，「～ン」への言語変化が「五段動詞（今回の調査だけではラ行五段動詞との差がわからない）→一段・カ変・サ変動詞」の順に変化が進行していくということである。

なお，「～ヤン」は「～ヤヘン」からの変化であると述べたが，近畿中央部の話者にとっては，「ン」のみが否定を意味しているというよりも「ヤン」が析出した一つの形態素として働いていると感じられるのである。この点は，上の「ンがラと結合して一つの形態素となり，ラ行五段動詞の否定形が『～ラン』と見なされた」とする見解とまさに相関する事態なのである。

「ヤン」の析出に関しては,「〜ヘン」が若年層で嫌われ出している可能性が考えられる。「語感」や「音韻」を含めた新たな調査とともに，他の言語的要素をも考慮に入れた考究が必要である。

6. 流入する「〜ヤン」の出自（5 節のまとめ）

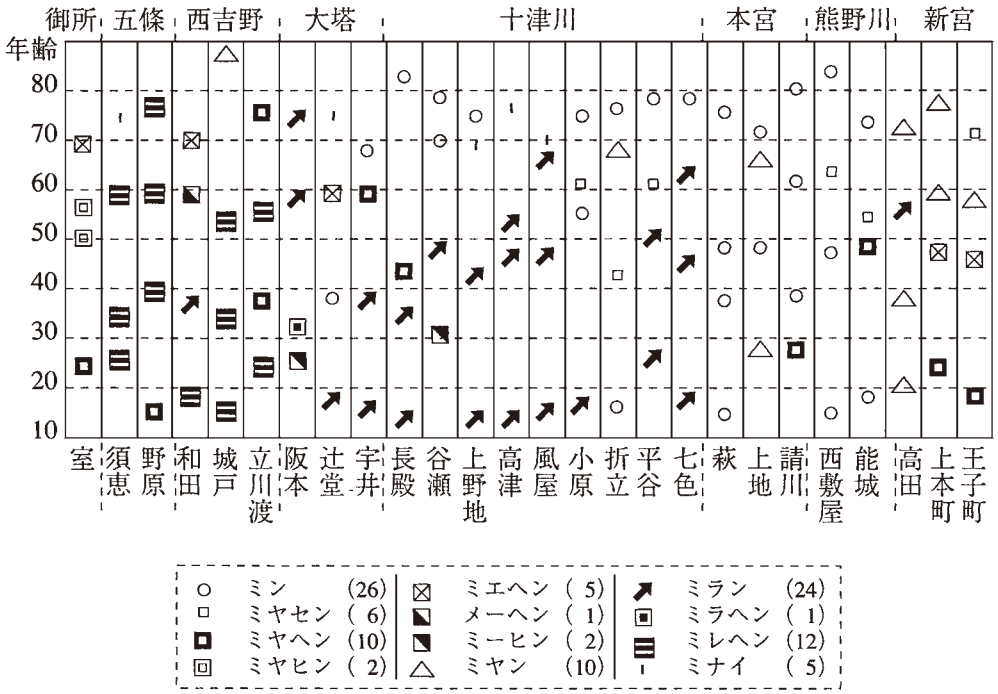
これまで見てきた「〜ヤン」そのものの出自について確認したい。日高（2014: 254–256）の「4. ヤン類の由来」にこれまでの先行研究をまとめ考察した記述がある。それによると，先行研究の「(a) ミヤセン＞ミヤン（五段動詞のイカセン＞イカン等からの類推）」説・「(b) ミラン＞ミヤン（音変化）」説のうち，(b) の優位性を述べつつも「ヤン類の広がりと定着には，ヤヘン類の存在が関与している」ことを指摘している。この辺りを含め，再度 3.2 の図 5「見ない」と日高（2014）で引く先行研究の別の記述部分から検討したい。

日高（a）説は, 真田・宮治・井上（1995）からであるが, 同書には, 更に以下のような記述がある。

> さて，注目したいのは，五條・西吉野間に存在するミレヘンという形である。この形は高年層にあまり見られないので，比較的新しいものと考えられる。そこで，以下，ミレヘンの発生メカニズムについて分析してみよう。
>
> （中略）図 7［筆者注：このグロットグラムは省略する。: 93］は五段動詞「行く」の打消形の分布状況であったが，そこでは，南部［筆者注：西吉野（立川渡）以南，新宮まで］＝イカン，北部［筆者注：西吉野（城戸）以北，御所（須恵，なお，調査起点は室）まで］＝イケヘンの対立が存在し, 北部のイケヘンは借用による新しいものと推定された。すなわち，北部では，イカン→イケヘンの変遷が認められたのである。そして，これは五段動詞一般の流れでもある。この流れは，当地の人々に五段活用動詞と分類されるにいたった「見る」についても, そのまま当てはめられることになった。すなわち, ミラン→ミレヘンの変遷である。
>
> したがって, ミレヘンは類推によってこの地で新しく生まれたものと考えられるのである。
>
> （真田・宮治・井上 1995: 95–97）

真田らの調査は，1986 年および 1987 年である。あくまでも「ミレヘン」成立のメカニズムに注目しての記述であるが, この調査結果である表 7「「見ない」の表現形式」（次頁）を見ると,「ミヤン」や「ミヤセン」「ミヤヘン」も少なからず確認できる。30 年程度前の調査である。この調査結果と現在の老年層の分布である図 5「見ない」を比較すると，1986 年当時分布した,「ミレヘン」は見当たらない。一方, 図 5 では近畿中央部とりわけ, 大阪から進入したと思われる「ミーヒン」や「メーヘン」,「ミ（ー）ヘン」といった形式や「ミヤ（ー）ヘン」や「ミヤン」といった形式の分布が確認できる。また, 当時若年層で勢力を増大させつつあった「ミラン」は図 5「見ない」ではそれほど多くは確認できない。これらの事実から，日高（2014）が「ヤン類の広がりと定着には，ヤヘン類の存在が関与している」と指摘するとおり，現在流入を果たしている「〜ヤン」は恐らく「ミヤヘン」などの「〜ヤヘン」から変化したものであり，まさに「〜ヘン」から「〜ン」への変化形であると考える。その根拠については 5.1 や 5.2 で，拍数や否定過去形式との相関から述べた。また，3.2 で示した図 6「来ない」と 3.3 で示した表 3「グロットグラムから見

表 7 「見ない」の表現形式（真田・宮治・井上 1995: 96 図 10）



る「コヤン」発生のメカニズム」からも裏付けることができる。なお，ラ行五段化した「ミラン」の勢力が増大しはじめた頃には，(b) 説由来の「ミヤン」も存在することを全く否定するものでないが，少なくとも現在流入を果たしている「〜ヤン」は「ミヤヘン」等の「〜ヤヘン」から変化したものである。すなわち，(a) 説をより支持することになるわけである。

7. 変化要因のまとめ

近畿中央部の若年層に流入する「〜ヤン」についてまとめたい。最新の調査結果や参照したこれまでの先行研究とその調査結果から，近畿中央部では，これまで二つの形式を持っていた否定形式の「〜ヘン」と「〜ン」は，より拍数が少ない「〜ン」に統合されつつある。その根拠は，5.1 の表 5「一段動詞（3 拍）（若年層）」の 3 拍の語においては「〜ヤン」がほとんど使われないという事実である（奈良「カリヤン」については別の要因を考察する必要がある）。加えて，5.2 の表 6「否定過去形式（大阪・若年層・2 拍）」で見たとおり，2 拍の動詞においても，否定過去形式になった場合は「〜ヤンカッタ」よりも「〜ンカッタ」が多用されることもその根拠である。それは，所属語彙が多い五段動詞からの類推により，全ての動詞の活用において体系の整合性を獲得することにより体系が単純化する方向である。また，「〜ヘン」より「〜ン」は拍数が少なく，これは省力化にもつながる。これは，合理的な変化である。ではなぜ，単純な否定の場合，近畿中央部以外や以西で古くから勢力を持つ語幹＋ンの「ミン」「コン」「セン」（「シン」）にならないかであるが，近畿中央部では，これまで使われ，勢力の強かった大阪弁や京ことばの語形

（セン由来の）ヘン類の語感から大きく異なるからであろう。つまり，近畿中央部ではこれまでの形式が関係して，近畿中央部のアイデンティティーや伝達機能として，動詞＋助動詞では発話の塊として 2 拍では成立せず，少なくとも 3 拍が必要なのではないかと考えている。そこで変化の一つの段階として「〜ヤヘン」から変化した「〜ヤン」が一時的に利用されているのだと考えている。つまり「〜ヤン」は最終的には「〜ン」のみとなるプロセスへの一つの段階の姿であろうということである。なお，「一つの段階」と述べているのは「〜ヘン」が「〜ン」に変化しても形態素としては「〜ヤン」と理解されているからである。ただ，一つの段階とはいえ，必ずしも今後を予想するものではない。それは，真田・宮治・井上（1995）の調査当時の当該地域は逆に「〜ン」から「〜ヘン」の方向に変化していたからである。どちらの方向に向かうかはその地域の社会的環境などの言語外的な要因によって左右されるのである。

8. おわりに

なぜここ数年急激にこのような変化が起こっているのかが気になるところである。その引き金は，恐らくことば以外の部分にもあるように感じている。今回は特に，このような方向の変化を促す社会的環境（＝言語外の要因）については確認できなかった。ただ，以下のようなことが気になるのである。

近畿中央部やその隣接地域という狭い地域で考えれば，例えば，通勤や通学の変化の状況である。近畿圏は，大阪を中心として，鉄道網が発達している。大阪から和歌山県や三重県へ直接アクセスすることも可能である。特に，若年層の女性が変化の先導者であることから，和歌山県や三重県から大阪府下に通学する女子高生や女子大学生の通学状況などが関係している可能性を感じる。また，宮治（1997）が指摘したとおり，近畿地方周縁部や西日本の各地から大阪などの大都市への人口移動も関係していそうである。特に，少子高齢化に伴う急速な地域社会の衰退のため，これまでにない急激な人口移動が起っているのではないかと考えている。その結果，近畿中央部以外の西日本で使われている「〜ン」が急激に流入してきているのではないだろうか。

また，日本全国と関西方言やその母体とすべき近畿中央部と標準語との関係といった広い地域から考えれば，例えば，標準語が関西全域や近畿中央部に及ぼす影響との関係である。「〜ヤン」を取り入れることで，関西の広い地域が同じ形式を使うことになる。これは，関西が一つになろうとする現れかもしれないし，首都圏に対する関西人のアイデンティティーの現れかもしれない。他にも，今回の変化が若年層を中心に急激に起こっていることから，新しいコミュニケーションツール（Twitter や Facebook 他）の爆発的な普及との関係も気になるところである。これらのツールの登場により話し言葉と書き言葉（入力する言葉）の垣根が取り払われつつあること，加えて，大阪人や関西人のアイデンティティーの表明としての方言使用なども今回の変化を促す要因の一つではないかと考える。これらの点に関しては，新しい調査や様々なデータを収集しつつ，今後解明していきたいと思う。

謝辞

先ず，このプロジェクトにお誘いいただき，拙稿を書くきっかけを与えていただいた真田信治先生に心から御礼を申し上げます。また，その研究課題の中から，海外での状況を確認しながら，国内での変化の相関をめぐって，近畿大学，天理大学，京都橘大学において行った拙い授業に根気よくつきあって下さった受講生の諸君，また，アンケート調査に御協力いただいた多くの方々に心から御礼申し上げます。お忙しい中，お時間をお割きいただき，本当に有り難うございました。ここに，調査結果の一部のご報告と拙い考察をもって，幾ばくか御恩に報いることができればと存じます。

参照文献

簡月真（2011）『台湾に渡った日本語の現在―リンガフランカとしての姿―』東京：明治書院.
日高水穂（2014）「近畿地方の方言形成のダイナミズム　寄せては返す「波」の伝播」小林隆（編），245–264.
井上史雄（1993）『日本語ウォッチング』（岩波新書）東京：岩波書店.
桐村喬・峪口有香子・岸江信介（2014）「方言の分析資料としてのマイクロブログデータ―アンケート調査との整合性―」『平成 26 年度日本地理学会発表要旨集』85.
岸江信介（2014）「近畿・四国地方における言語変化―動詞否定形式を例として―」小林隆（編），227–244.
小林隆（編）（2014）『柳田方言学の現代的意義―あいさつ表現と方言形成論―』東京：ひつじ書房.
国立国語研究所（編）（1991）『方言文法全国地図』第 2 集　東京：大蔵省印刷局.
宮治弘明（1997）「都市方言研究への一提言」『梅花女子大学文学部紀要　日本語・日本文学編』31: 1–12. 梅花女子大学文学部.
大西拓一郎（1999）「新しい方言と古い方言の全国分布―ナンダ・ナカッタなど打消過去の表現をめぐって―」『日本語学』18(13): 97–110. 東京：明治書院.
太田有多子（2013）「紀伊半島沿岸部における打消表現」岸江信介・太田有多子・中井精一・鳥谷善史（編）『都市と周縁のことば』63–90. 大阪：和泉書院.
真田信治・宮治弘明・井上文子（1995）「第 4 章　紀伊半島における方言の動態」徳川宗賢・真田信治（編）『関西方言の社会言語学』81–102. 東京：世界思想社.
高木千恵（1999）「若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて―談話から見た使用実態―」『現代日本語研究』6: 78–99. 大阪大学日本語学講座.

Usage of a New Negative Suffix *–yan* among the Young Generation of Kansai Speakers

TORITANI Yoshifumi

Tenri University / Project Collaborator, NINJAL [–2013.09]

Abstract

Two negative suffixes in central Kansai dialects, *–n* and *–hen*, recently exhibit similar usage, especially in the young age group. Results of a survey in Osaka and Nara show that young speakers prefer *–yan*, a new negative suffix found for such verb conjugation types as two-mora vowel verbs and irregular conjugation verbs. This paper reports the diffusion from Wakayama and Mie to Osaka and Nara through geolinguistic surveys and other relevant studies. The paper argues that motivations of the linguistic change from *–hen* to *–n* are internally determined by the loss of the semantic distinction between the suffixes, and externally determined by the re-organization of the negation system and the practicality of these suffixes. Other non-consonant, two-mora verbs have not demonstrated changes from *–hen* to *–n* directly. Instead a new suffix *–miyan*, as in *miyahen* (‘not’ see), was adopted in the process of change. This *–miyan* is not observed in standard Japanese. This hypothesis regarding the change of these negative suffixes is derived from the model of the linguistic change of a Japanese-based creole in Taiwan.

Key words: *–yan*, negative suffixes, geolinguistics, diffusion, re-organization